現代っ子ソッポ

都立秋川

公立唯一の全寮制高校

公立唯一の全寮制高校として知られる東京都立秋川高校がいま、創立二十余年にして曲がり角に立たされている。受験生が毎年減り、また入学しながら中途で去っていく生徒が多いため。旧制高校に似た「全人教育」に、共同生活を嫌う現代っ子がなじめないらしい。受験生募集のために全校あげてのPR活動も始めている。

（山見　郁雄編集委員
八田　伸拓記者）

第1期卒業生が植林したメタセコイアの並木。正門から300㍍続く
＝東京都秋川市下代継の都立秋川高で

東京都心から西へ三十㌔余り、奥多摩の山並みに囲まれた田園地帯にキャンパスがある。敷地は十五万平方㍍。普通の学校の五、六倍はある。正門から高さ二十㍍近いメタセコイアの並木が続き、校舎がなかなか見えないほど。両側に図書館、全校生が入れる食堂、学年別の三つの寮棟が並ぶ。サッカー、野球、ラグビーのグラウンドもそれぞれ別々にある。

共同生活イヤ……生徒減

定員割れと退学と

海外帰国、他県との転勤者子弟、辺地校出身者などを対象に昭和四十年四月開校した。公立の全寮制高校のテストケースとして注目された。四十四年からは自宅が狭いなど、「教育条件が不十分な家庭の子弟」も対象に加えられ、五十八年から全寮制を希望する一般生徒の入学の道も開かれた。

現在の在校生は、五百七十四人で全員男子。寮生の一日は、朝六時四十五分の起床ラッパで始まる。七時にグラウンドで全員点呼と体操。放課後、二時間余の外出時間がある。夕食後の七時半から十時半まで、寮の学習室で自習。塾通いはできないが、舎監の教師に個人指導を受けるとか、気の合った生徒同士の共同学習もできる。「家庭教師がいると同じで、やる気さえあればどれほど勉強のやれる学校はない。寮生活で協調性、礼儀、自律心も養われる」と先生たちはいう。

今春、慶大に進学したOBの加藤啓輔君(二九)も、三年間の寮生活を満足げに振り返る。「放課後、どんなにラグビーに打ち込んでいても、時間厳守だから夕食時にはみんな定刻に切り上げる。夜三時間の学習時間もきっちりとれた。全寮制だからこそ、文武両道が可能でした」

開校当初は二百四十人の定員に対し、七百人余りの受験生が集まった。しかし、その後は二、三百人台。定員をようやく超える程度で、六十一年は百七十五人だった。六十二年は一百二十九人と盛り返したが、定員割れ。しかも、卒業までに二割前後が退学してしまう。

「全人教育」も看板

知育偏重といった戦後教育のひずみを克服し、寮生活と勉学の触れ合いを求めた旧制高校教育に範をおいた「全人教育」にも期待がかけられた。運動部の必修クラブ制を開校時から実施、四十㌔徒歩ラリー、十三㌔クロスカントリーレース、登山、クラブ合宿などのスポーツ行事を多くとり入れている。

寮生活の規律は確かに厳しい。外泊は月に二回、それも土曜日に帰宅、一泊しても日曜の夕食時までには戻らなければならない。朝の点呼に遅れると、グラウンド三周の罰。外出からの帰寮が一分でも遅れると二週間の外出禁止。喫煙で二度注意されると退学だ。学年別に一室五、六人の構成で、一年間は同じメンバーで友情を深める。仲間づき合いにつまずき、退寮すれば即退学だ。

逃げ場のない状況で、協調性と自己形成をはかりながら、真の人間関係を学ぶという。共同生活に行き詰まった生徒は、舎監の教師と消灯後に舎監室でお茶を飲みながら夜遅くまで父親代わりに相談もできる。

米ノースカロライナ州立高校（全寮制）と姉妹校で、交換留学などでの国際理解にも力を入れている。現在、父母の居住地は海外や他県が一割弱。ほかは伊豆大島など離島を含む都内が大部分を占める。

私立は増加傾向に

都内の中学校を対象の説明会などでは、教育の理想を訴えてきた。が、中学校側の反応は鈍く、受験生の人気がいまいち盛り上がらない。その理由として①制約にしばられる寮生活への抵抗②塾に行けない、という大学進学への不安③そうした不人気から起こる合格レベルの低下――などがあげられる。公立なのに男女共学でないことも、現代の中学生にそっぽを向かれている。

普通科公立高校での全寮制は、その後教育庁で計画がねられたものの実現をみていない。しかし、私立では全国に三十校ある。岡山県などに新設の動きもある。一流大学への進学や技術・職業系など、学習内容、教育方針に特徴を打ち出したところが多く、こうした学校の応募者は増加傾向といわれる。首都圏では、聖パウロ学園（八王子市）、秀明学園（埼玉県川越市）、麗沢（千葉県柏市）、暁星国際学園（木更津市）などがあるが、「全人教育」を第一に掲げる秋川高校とは性格がやや異なるようだ。

宗方俊道校長はこういう。

「全寮制は元来、受験のためのものではない。それでも、入学時点からの学力の伸びは他校より著しく、一流大学の推薦枠も多いのです。規律だけで見れば、いわば入りやすくて出にくい学校。ここで鍛えられれば、学力も含めた全人格的な成長がきっと期待できます」

「制約多く塾にも行けない」

ラグビー部の練習。夕食時間の午後6時までには切り上げる

在校生も動員「受験生ヤァーイ」

秋川高校では、このままではジリ貧と、中学校の進学指導が始まる時期をねらって、先徒自身を動員してのPR作戦を展開中だ。今春、入学したばかりの一年生二百二十人全員も十月から出身中学を一斉訪問した。面会の申し込みなどはすべて本人の仕事。寮生活や授業の実態などを生徒自身の口から話し、半年間の成長ぶりを中学の担任教師らに直接見てもらおう、というねらいだ。これに二、三年生が続き、教職員も父母や同窓会も加わった。

出身中学訪問の報告書も生徒自身がまとめた。「成果は来春の入試までわかりませんが、もし、これでも受験生が増えないようだと、来年度から全国的な受験生の減少期にも入るので…」と小泉晴一教頭は心配する。

宗方校長も「確かに古典的な鍛錬主義で、時流に合わないともいえる。が、これからは、親に寄りかかったひ弱な秀才を育てることより精神・体力を鍛える教育こそ大切なはずです」と訴えていた。

ロッカールーム

「金時先生」歯がゆい思い

「笑った時の表情から「金時さん」のニックネームで親しまれ、豪快な泳ぎで一九七二年のミュンヘン五輪吉武バタフライのゴールド・メダリストになった西口（旧姓青木）まゆみさん(三四)＝写真。天理大を卒業して高校教師となり、十一年目。いまは西宮市立西宮東高校で保健体育を教えている。

「やればやるほど難しくなる」と悩みながらも教育に情熱を傾ける。

ミュンヘン五輪の時は、直前に世界新を出し、金メダルの期待が一段と高まった。それでも「気にしない、気にしない。ダメだったら仕方ない」とレースに臨み、見事に世界新で優勝した。この楽天的な性格は変わらない。年に四、五回、講演を頼まれるが、「行く前に話す内容なんか考えないで、いつも出たとこ勝負。だから、つい、苦しかった練習の話となったりして、あまり受けないのよ」と笑う。

今は一粒ダネの雄介ちゃん(三)の母。泳ぐこともほとんどなくなった。「独身時代は、むしゃくしゃするとよく泳いだけど、子供もできたし」。金メダルも引き出しにしまったままだ。

週に十二回ほどの授業を持つ。もちろん、水泳部の顧問。「私は毎日たたかれながら教えられたが、今の高校は自由で何でもできる。もっと自分で欲を持ってやってくれたら」と歯がゆい思いらしい。

陸に上がった「金時先生」も、オリンピックが近づくと心が騒ぐ。ミュンヘン五輪以来、日本はメダルゼロが続いている。「あまり期待をかけるのもいやだけど、ソウルでは頑張ってほしいですね」

（森田）